

「みんな自分の意見を言うようになったし、お金をめぐる争いがなくなって、この一年で村は劇的に変わったよ！」

—2013年2月インド訪問記—

岡野内 正

<さらに劇的な変化>

ダムができて畑に水が引けるようになって、自分が赴任して以来の10年間で村は劇的に変わったよ、という小学校長先生の話聞いて、さらに尋ねた。「昨年ベーシック・インカム試験プロジェクトが始まってからはどうでしたか？」人類学者で今回の試験プロジェクトの質的調査部門の責任者、ひげずらのSさんは、ニタツとうなずいて、それをヒンディー語に訳してくれる。

あくまでも冷静な顔を崩さないまじめそのもの、キリスト教福音派の信者で説教者でもある年齢は40代半ばくらいかと思われる校長先生が、静かに答える。それを訳すSさんは、少し興奮気味。「ははは。この1年間は、さらに劇的な変化だって言ってるよ！」「ほう！？」「村人が自分の意見を言うようになった。そして、お金をめぐる村人どうしの争いがなくなったって。」

<すごい証言>

「すごい証言だったね！」とSさん。「ええ。10年前からずっと村を見てきた人が劇的な変化だなんていうところがすごいですね。」「うん。それに、大事なのは、彼が、村人じゃなくて、試験プロジェクトに関して利害関係のない人物で、中立の立場からの証言だっていうことだよ。」と、ずっとこの村で聞き取りをやってきたSさんもいまだに興奮気味。

そこは、インド中央部デカン高原の真ん中にあるマドヤプラデシュ州の先住民(Bhil tribe)の村。独立後のインド共和国憲法で、これまでの差別を是正する措置をとるようにならざるにわざわざ書き込まれているというカースト制度最底辺の不可触民とされた人々が住む。食事は一日に2回が普通でお金も収穫物もないときは1回という栄養不足の村。前夜は、花を発酵させて作るこの村伝統の焼酎をダム湖の魚を肴にして飲み、結婚式のとときの村の女性たちの踊りと私たちのソーランや阿波踊りの交流、この地域でも激しかったというパキスタンとインドとの分離独立の際の戦闘を題材にした村の男たちの劇も飛び出した村人の歓迎集会の後、このインド社会の最下層の村の小学校の教室で雑魚寝。インタビューはその翌朝当然のように朝食なしの村の家の軒下の土間に座って行われた。

<ユニセフの資金による労働組合の試験プロジェクト>

2013年2月中旬。法政大学の私のゼミ生を中心とする10人ばかりで、2012年

に行われたインドのベーシック・インカム試験実施プロジェクトの村を訪問した。子どもの権利のための国際機関ユニセフ（UNICEF）が資金を提供し、女性だけで組織するインドの労働組合として定評があり、全インドで百万人近くの組合員数を誇る SEWA（Self Employed Women's Association:直訳すると「自分自身に雇われた女性労働者の会」）が実施した「無条件現金移転（Unconditional Cash Transfer）」プロジェクト。すでにインド政府は、これまでの貧困対策や社会政策の中心となっていた現物給付を現金給付に転換することを表明しているが、それを受けて、それならいっそ、ターゲットとする貧困地域住民の全員に対して無条件に現金を給付したほうが効果的ではないか、という仮説を、実際の村落で社会実験して結果を見よう、というのがプロジェクトの趣旨だ。もちろん、この仮説が証明されれば、SEWA は、デモ行進、ロビー活動、キャンペーンに取り組み、インド政府の政策を変えるために組織をあげて取り組むことになる。インド社会の最底辺で、厳しい男女差別に苦しみながら、土木工事や農場での日雇い仕事、森で木に登って巻きタバコをまくための葉を集めたり、自宅でタバコを巻いたり、線香作りの内職をしたり、さらに路上で物売りをしてなんとか生き延びる女性たちを組織して、腐敗役人や政府の無作為を追及してきた、闘う労働組合が SEWA なのだ。そんなプロジェクトに、子どもの権利を守る国連の専門組織ユニセフがその趣旨に賛同して資金を出しているのだ。つまり、世界がこの実験結果と、労働組合のこれからの運動と、インド政府の動きに注目するはめになる。世界史の流れがここから変わるかもしれない。

<ドイツでの出会い>

昨年 2012 年 9 月にドイツのミュンヘンで開催されたベーシック・インカム地球ネットワークの研究大会。すべての個人に無条件で生活に必要な最低限の現金給付を保障する政策、すなわちベーシック・インカムの導入をめざすのがこの学会。世界初の試験実施プロジェクトが行われてすでに 5 年目になるナミビア、ブラジルとともに、世界で三番目の実験を行ったインドからも 3 人が参加する全体セッション。…インドからの報告は、数か所の村で 6 千人規模の住民に対して 1 年弱に区切った厳密な調査を伴う大規模な実験であったこと。さらにユニセフという国際機関が資金を提供したことで、注目を引いた。会場で上映されたビデオは、インドのカーストの最底辺の村の村人たちが、全住民対象の現金給付によって活気づいているさまがありありと。ナミビア、ブラジルと現場をみてきた私にとっては、ダメ押しの大成功としか思えない。これは行くしかない！…会場で、インドの SEWA の代表をつかまえて、現地訪問を約束。それから半年。そのときの会場にいたマドヤプラデシュ州の SEWA 事務局長と先住民女性の活動家とついにインドで再会。

<実験結果報告書作成の最終段階>

実は、インドに行きたい！というメールを出して、しばらく返事がこなかった。催促メールを二度ほど出したところでようやく、ごめんなさい！いろいろ話し合っていて、…という返事。まだ SEWA としては、正式に実験結果が出るまでは、ベーシック・インカム政策推進を決定したわけではないので、あくまで、個人向けの無条件現金移転社会実験にいたるまでの SEWA の活動を知ってもらおうという趣旨なら歓迎するよ、と。担当者となった S さんと具体的にメールをやりとりするうちに、不可触民とされてきた先住民の村での宿泊を含む、もりだくさんなプログラムが。しかも最初のプロジェクト担当者との話し合いの中から、実は、この2月は実験報告書作成の最終段階であることを知った。私たちを含めて再び現場にいて、結果の見直しをしたい。ぜひ、外部の目から、なんでも質問してほしい。ナミビアとブラジルを見てきたのなら、その内容もぜひ聞かせてほしい！と。…私は、そんな貴重な場面に参加できたことに興奮して、ベーシック・インカムの政策が、村人ひとりひとりの肉体的、経済的、社会的なパワーをアップして、社会を活性化していくことは、もうはっきりしてると思う。問題は、そんな政策を実現させる政治的なパワーをどうつけていくか。その点で、百戦錬磨の労働組合 SEWA には、とっても期待してる。これからのインドの展開が本当に楽しみです！などと。

<ユニセフ代表との会談>

SEWA は、わざわざ高齢の議長や事務局長や附属機関の信用組合の CEO までそろえて、マドヤプラデシュ州の州都でのマドヤプラデシュ州のユニセフ代表との会談をセッティングしてくれた。代表は、子ども権利を守るユニセフの活動の中でも、インド、そしてその中央部にあるこの州での活動の重要性を力説したあとで、ユニセフ機関を代表して、今回の個人向け無条件現金移転の実験プロジェクトに大いに期待しており、効果的であることが実証されれば、さっそく組織をあげて、その普及に努めたいと表明。なにごとにも新しいことには抵抗が大きいもので、確かに、反対意見があった。だが、子どもを守るために、子どもだけをターゲットにした活動では限界があることはもはや明白であり、コストと効果の点での有効性が確認されれば、すぐにその成果をユニセフの活動に反映させるとともに、州政府、さらにインド政府にも働きかけていきたい、と。…こちらは、世界が注目しているので、ぜひよろしく！と。なんでも、SEWA は、この実験プロジェクトの資金をイギリスの公的援助機関、アメリカのある財団、国連のほかの機関に打診したあげく、ようやく、この州のユニセフが取り上げてくれたとか。

<厳密な社会実験>

というわけで、とにかく、薬の効能試験のような実験が行われた。同じ期間にインド社会全体に起こった変化と現金移転という薬の効果とを比較可能にするために、現金移転をやらない村落との両方での調査。支給開始前、途中、開始後の調査、その調査も統計的なデータを集める量的調査と、社会人類学のSさんが担当したひたすら聞き取りの質的調査。サンプルとなる対象の村も、SEWAが活動している村と、活動していない村の両方から、ランダムに選定。純粋な現金移転の効果とSEWAの活動の効果とを区別できるようにするためだ。先住民の村でも実験が行われたのは、州政府からの要請だという。カースト差別対策への効果もついでに、調べて！ということで。実験の全体は、国際開発分野での長年の経験をもち、以前からSEWAともかかわりのあったイギリスの経済学者で、ベーシック・インカム政策の熱烈な唱道者でもあるガイ・スタンディングが加わって計画されたという。…そうそう、そのスタンディング氏は、ドイツの報告のときに、自分も映っているプロジェクト村の様子と村人の話の入ったビデオを見ながら、「ビデオ完成後初めて見たもので…」といいながら、満場の聴衆の前で涙をぼろぼろ。とにかく、たいへんな苦勞だったらしい。

<若者たち、女性たち、老人たち>

社会人類学者のひげずらのSさんは、この調査の実際面を担当したSEWAが動員した若手スタッフたちと、こちらのゼミ学生との交流に大いに力点を置いてくれた。ほぼ1週間住み込んだインドールの町のホテルでは、男子学生の部屋に、インタビュー調査の手伝いをやっていたインドの学生も同宿。なんでもカルチュラル・スタディーズの専攻とかで、カースト制度や宗教、言語の問題など、歴史的な視点と植民地支配や文化支配の観点からインドのことをよく勉強していて、話しておもしろい。雰囲気も、ああ、こういうの日本にもいるよね、という飄々とした学生の雰囲気。女性だけの労働組合なので、当然女性のスタッフが多いが、若い男性スタッフもそれなりに。プロジェクトをやったSEWAの村、SEWAのいない村、先住民の村、さらにプロジェクトとは直接関係のないSEWAの都市の活動拠点やSEWAが作って無担保低利子で貸し付けをやる信用組合を訪問するうちに、私も、学生たちも、一見混沌としたインド社会を底辺で動かす人々の流れを実感。

<お金を飼い馴らすファイナンシャル・リテラシー>

その信用組合のオフィスの2階では、村人を相手に開発されたゲームを使って、今信用組合がSEWAとともに取り組んでいる、ファイナンシャル・リテラシー

(Financial Literacy) の教育を体験した。ユニセフがお金を出して、欧米の教育機関が開発したものを元に作ったものだという。すごろくのようになっていたりする数種類あるが、要するに、つまらないことでお金使ってしまうと、あとで困るよ。ちょっとづつでいいから、お金を貯めておこうよね。遊んだり、宗教のお祭り、冠婚葬祭にはずんだりする前に、病気やケガの時の薬、子どもの教育、どうしても必要な出費があるでしょ。そのことをよく考えようね。高利貸しに借りるとあとが大変、ほんとうに損するよ…というのが基本メッセージ。無条件現金移転の試験プロジェクトの後は、これに力を入れているという。そうそう、試験プロジェクトでは、①無条件、②現金、③個人向けということのほかに、④銀行口座を通じて、⑤毎月定期的に、ということにもこだわったという。この銀行口座の開設は、村ではほんとうにたいへんで、口座開設が間に合わなくて、当初は、SEWA のプロジェクトスタッフが現金を持参したという。ただし、SEWA の活動する村では、SEWA の活動家を通じて、SEWA の信用組合がすみやかに口座を開設できた。

<高利貸しと地主への債務奴隷制が根づいた村>

村人へのこれまでのインタビュー記録と、私たちのインタビューによって明らかになってきたのは、こんなファイナンシャル・リテラシー教育がほんとうに熱望されるような村の現実だった。インド経済の対外開放と自由化によってなるほど村の内部からも中間層のようなものが生まれてきているかもしれない。我々も、車や新築した家が並ぶ SEWA の活動していない村のカースト上層部分の家を見て、その流れは確認できた。しかし、その同じ村の不可触民カースト住民の農業労働者たちは、実際は、借金のために異常な低賃金で、上層カーストの農民のために働いているという。特に子どもは借金のかたに奉公人のような暮らしを強いられている場合も。家にも入れてもらったが、土間に敷物を敷いて寝る暮らし、牛といっしょに寝る土間。そんな竈の上に置かれた壊れたテレビが無用に光る。そんな人々の間でも、いや、だからこそ、つかの間でも、食糧や借金返済などの出費に使えた現金移転はうれしかったようで、老女たちが花を差し出して迎えてくれた。SEWA の活動する村や先住民村では、SEWA の信用組合での積み立てと合わせて、ヤギや水牛や牛を買ったなどという話が続出。

<先住民村での住民集会>

S さんの話では、現金移転を開始してから、我々が宿泊した先住民村では、住民の集まりがあった。そこでは、村のある老人から、これを機会に、これまでの結婚式や祭りでの大盤振る舞いをやめようではないか、という提案があったと

いう。小学校長が「村人が自分を表現するようになった」というというのは具体的には公共の場でのこのような発言を指すのだろう。インタビューの記録を見れば、結婚式と祭りの出費は極端に大きい。村人は愚かではない。だがこれまでは、そんな観察が表明される機会はなかった。個人への無条件の現金移転をきっかけにして、人々が、お金の使い道を真剣に考え、お互いに示し合せてお金の流出を防ごうとしている。グローバル市場経済は、まさにお金の支配する世界だが、お金のせいで人々のきずなをずたずたにされ、飢えに苦しむのではなく、人々が示し合せて、お金をうまく使って、いい人間関係を作ろうよ、という道を村人は示しているのではないだろうか。

<ひとりひとりがお財布の口を握る自由社会>

ひとりひとりがお財布の口を握るのが自由社会というものだろう。社会学者マックス・ウェーバーの理屈を平たく言えば、近代社会の合理性を支える計算可能性は、自分のお財布の口を握って試行錯誤をすることから生まれてくる。お財布の口を握って、初めて、自由にもものが言える、なんてこともあるかもしれない。ひとりひとりの自由を社会が保障するというのであれば、自由主義でも社会主義でもなく、自由社会主義といえるかもしれない。それは、新しい自由主義の掛け声のもとでお金の支配が進み、人間関係と社会がずたずたにされながらも、社会のためという官僚支配の記憶が強烈なために、グローバル市場経済を受け入れるほかはなすすべもない 21 世紀の人類社会にとって、新しい道を示しているように思える。2012 年のインドの現金移転実験は、人類史上初めての、壮大な実験と言えるかもしれない。 (2013 年 3 月 27 日)